抗日パルチザン参加者たちの回想記

訳　鈴木武

未来の幸福のために（特選集15、第6巻第4話）　リ・ヨンスク　3

トゥマン（豆満）江の氷塊をかき分けて（特選集18、第7巻第9話）　キム・ドンギュ　13

カガヨンでの工作（全訳「敵を瓦解させて」、第3巻第21話）　キム・ドンギュ　26

未来の幸福のために（特選集15、第6巻第4話）

リ・ヨンスク

私たちは一九三四年冬からキム・イルソン同志が領率される抗日遊撃隊にずっとついて歩きながら援護活動を行った。

テヨプチャとポマヂョンヂャの樹林の中からスパサンヂュとソナマの密林の中の行く先々で私たちは密営をはって遊撃隊と一緒に暮らしてきた。

奴等の〈討伐〉がひどければ私たちは再びこの樹林からあの樹林へと移って行かなければならなかった。

このようにして私たちは一九三八年の冬まで過ごしてきた。

一九三八年、この年は私たちにとって非常に困難な時期だった。

当時遊撃隊によって甚大な打撃を受けた日帝は、ポチョン、プグム、ホリム地方に〈討伐〉拠点を置き、大々的な兵力を動員して私たちの密営を侵襲してきた。そのため私たちはそれ以上後方密営に残っていることはできなくなった。

このような条件の下でそれまで後方密営で生活していた私たち後方の家族たちは一九三八年十二月に軍部の指示によってここタハルラヂュ密営に集まってきた。

その時私には母と四才になった娘がいた。

私たちはここから再び安全地帯に移って行くことになっていた。

ところが上部からは戦える人は武装隊伍について行っても良いと私たちに言った。

この言葉を聞いた瞬間私の心は、キム・イルソン同志が領導される抗日遊撃隊に入隊できるという喜びで高鳴った。

私の前には遊撃隊伍に従うか、そうでなければ母と幼い子について安全地帯に行くかという二つの道が置かれていた。

私はためらいなく前者の道を選んだ。私は私の家族たちにあれほど大きな苦痛をもたらし、私の父を殺した奴等に必ず復讐しようと固く決意を固めたことも一度や二度ではなかった。そうでなくてもいったん革命のために立ち上がった以上、たとえ女の身であっても直接手に武器を取って奴等と戦いたかったのである。そんな私は必ず遊撃隊に入隊する機会が来るはずだと固く信じていた。

私はあれほど願いに願っていたことが実現して遊撃隊に行くようになったのだと考えると、胸がときめいて到底心を鎮めることができなかった。

しかしいざ出発しようとすると、家族たちと別れるのがまた名残惜しかった。しばしでも

離れては生きられないようなこの人たちと別れなければならないと考える時、そしてこの道がいつ再び会えるか分からないそんな道なのだと考える時、私の心はたまらなく寂しかった。

その日の夜私は最後の家族と一緒の寝床に就いた。私はいろんな思いで到底寝付くことができなかった。

出発する前に幼い子に何かしてやりたくて、私は再び起きて座り、荷物をほどいた。荷物をほどいて布切れを探す私の目の前には、吹雪が吹き荒れ、骨をえぐるような寒さに、続けて三日もおなかを空かせた母親の背に負われて、おなかが空いたと泣いていた幼い子の哀れな姿が浮かんでくるのだった。

私は幼い子を何とかしてちょっとでも温かくしてやらなければという思いで、綿入りの足袋を繕うことにした。私は綿入りの冬服からすっかり綿を抜き取り、布切れを集めて幼い子の綿入り足袋を作り始めた。しかし足袋を作る私の手は震えてちゃんとつかめなかった。この夜が明ければ明日はこの子と永遠に別れるような気がして心はしきりに泣きだしそうになった。

私は眠っている子供の顔を穴のあくほど見つめたが、見れば見るほどなお見たくなる気持ちをどうすることもできなかった。泣いていても敵が来るという言葉さえ聞けばぴたっと泣きやんで私のそばに黙って駆け寄って抱かれたこの子、敵が銃剣で私を脅した時にも、その小さな手で私をぎゅっとつかんで胸に顔を埋めながらしがみついていたこの子と私がどうし

てしばしでも離れて暮らすことができるというのか！

私は何も知らずに眠っている幼い子を穴のあくほど見つめながら、子供の頭をなでてやったり、口を合わせたり、頬をさすってやったりした。眠っている子供の息の音と温かい体温が私の胸に情愛深くしみこんだ。すでに夜はかなり更けて明け方が近くなってくるようだった。私は針を動かす手を早めながら、この夜がもうちょっと長かったならばと願った。

時間は容赦なく流れ、過ぎし日の追憶は絶え間なく連なって浮かんできた。

〈討伐隊〉の奴等が襲ってきて私の父を銃殺し、母に乱暴を働きながら私たちを引っ張っていったこと、遊撃隊に従って奴等の〈討伐〉を避けてあの険しい樹林の中を抜けて歩いていったことなどが走馬灯のように目の前を過ぎていくのだった。

その中でも忘れようとて忘れられない革命闘士キム・チュナトンムのあの崇高な姿が思い浮かんで私の胸はいっぱいになった。そして彼の声が私の耳元で今にも響くようだった。私は目を閉じていつのまにか数年前の回想に深くふけってしまった。…

それは一九三六年の晩秋にあったことである。当時私は五名のトンムたちとともにテヨプチャ区から二里離れたウァンスピョンという谷間に縫衣隊工作のために密営をはっていた。

ところがある日ここで〈討伐隊〉の奴等の襲撃を受けて私と他の五名のトンムたちは逮捕され、トサンヂュ監獄に監禁された。

奴等は私たちに数日間ひどい尋問を尽くした末に、「何のために山でそのように苦労をする

のだ。街に下りてきて家族たちと一緒に平穏に暮らしたくないのか。早く山に行った夫たちに手紙を書いて連れてこさせろ。」と言いながら懐柔し始めた。

私はそいつらの言うせりふが余りにもとんでもない呪わしいことだったので、「山で生まれて山で育った人間がどうして街で暮らせるのか。」と皮肉った。

奴等は一九三七年の正月には〈宴会〉まで開いて私たちに〈新しい生活〉を重ねて強要した。そうしながら奴等は〈パルチザンの隊長〉を連れてきたが、彼の健康を回復させるために病院に入院させたので、お前たちが会って看護してやらなければいけないと私たちに言った。〈パルチザンの隊長〉という言葉に私たちの胸はどきっとした。(本当にパルチザンの隊長が奴等に逮捕されてきたというのか?!) このように考えると一刻も早く駆けつけたかった。しかし一方奴等が何か奸計を企んで私たちをだまそうとしているのではないかという疑心も少なからず浮かんだ。私たちは奴等の強要にやむを得ず従うふりをしながら、びくびくした気持ちを抱いて〈パルチザンの隊長〉のところに行った。行ってみるとそこは病院ではなく、病監だった。私たちはどきどきする胸を抑えながら病監の扉の前に近づいた。どんなことが私たちの前で起るのかという思いで私たちの心は震えた。疑惑と恐怖が入り混じった気持ちで静かに扉を開けて入った。瞬間血なまぐさい臭いが鼻をつんと突いた。

部屋の中は薄暗かった。部屋の中を注意深く探るうちに一隅に目が届くと、私はどきっと驚かざるを得なかった。ただセメントだけの床に藁を敷いて、雑巾のようにぼろぼろになっ

た毛布で半身を覆った、骸骨のようになった人が横たわっているではないか！

この時私の頭には（狡猾な奴等が私たちを死んだ人間が横たわっている部屋に押し込めて閉じ込めようとしているのではないか？）という考えもとっさに浮かんだ。

その次の瞬間、私は横たわっている人が本当に私たちの人間に間違いないと分かると、勇気を出して一歩一歩その人のところに近づいた。横たわっている人の顔は血と傷で見分けるのが困難だった。服はずたずたに破れ、現われた肉は赤黒く腫れ上がっていた。やけどを負ったうえにひどい拷問に苦しめられたのに違いなかった。彼は口をぎゅっとつぐんでいた。歯を食いしばってひどい苦痛に耐えているのに違いなかった。私はその顔を注意深く眺めた。見れば見るほどどこかできっと見たことがあるそんな見覚えのある顔だった。

しばらく後に私は彼の体を抱きしめてすすり泣き始めた。彼は勇敢な遊撃隊員で、私たちの後方密営にしょっちゅう出入りしながら嬉しい消息を伝えてくれたキム・チュナトンムだった。

「あっ！　キム・チュナトンム！」私は思わず大きな声を挙げながら彼を呼んだ。チュナトンムは目を開けた。彼は喜びと驚きの眼差しで私たちをよく見ると、再び目を閉じて呻吟の声をあげた。

私たちはこの時初めて奴等の陰険な術策を知ることができた。奴等は私たちをここに送ることで、私たちと私たちの夫たちの運命が、共産主義者の運命が結局はどうなるかをしっか

りと見ろというのだった。そのようにして私たちに恐怖を与えることによって私たちの心をくつがえそうという陰兇な術策だった。

私は激憤をこらえきれずに涙を飲んだ。すぐにでもこの魔窟を飛び出してこの恨みを百倍千倍に晴らそうと決心した。

私たちが皆黙ってチュナトンムの顔を見つめていると、しばらく後に彼もそっと目を開けて私たちをしばらく眺めてから、裂けた唇を震わせながら、やっと聞き取れるぐらいの低い声でぽつりぽつりと話すのだった。

「奴等が…私をこのようにしたのです。…」そして彼は歯ぎしりした。彼の両目には憎悪の炎が燃えさかり、全身に痙攣を起こした。私たちは急いで彼を鎮静させ、手ぬぐいを冷たい水で濡らして額に載せてやった。

彼は私たちが泣くのを見ると、泣いてはいけないと言いながら、奴等に絶対に屈服してはならないことと、共産主義者らしく最後まで闘わなければならないということを話した。彼の一言一言は私の胸がいっぱいになるほど響き、私は声が詰まって何も言えなかった。

病監から出てきた私たちはその日の夜彼の姿を目の前に描きながら一晩中眠れなかった。火のように熱い彼の言葉、人の胸を掴んで放さない彼の言葉は、私の心の中に無尽蔵の力と勇気を湧き立たせたのである。

このように奴等が企んだ術策は逆効果をもたらしていたにもかかわらず、これに気づかな

い敵は次の日からずっと一人ずつチュナトンムの部屋に送り込んだ。
ある日私は再び病監に入るようになった。しかしこれが私が彼に会える最後の機会になろうとは知る由もなかった。
チュナトンムは私を自分の横に座らせて手をぎゅっと握って優しくなでながら言うのだった。
「トンムたちに会いたい。…彼らが恋しい。…戦友たちと一緒にこれ以上闘えずに死ぬのが悔しい。本当に残念です。…しかし私は泣きません。…死ぬまで堂々と生きる積もりです。…革命がそれを私に要求しているのですから！　それを守るということが私にとっては大きな幸福です。…」
このように話す彼の顔には紅潮が巡り、笑みの浮かんだ眼光は輝いていた。その後私たちは再び彼に会うことはできなかった。
深い回想にふけっていた私は窓が薄明るくなる頃にやっと回想から覚めた。
私は両手を合わせて固く握り、心の中で固く誓った。キム・チュナトンムは私たちと私たちの後代の未来の幸福のために闘って死んだ。彼は死ぬ最後の瞬間まで闘争の中に幸福を求めた。
私も彼のように闘争の炎の中に幸福を求めよう。心を大きく持って、ただひとえに彼があれほど願いに願った未来の幸福のために闘いの道を堂々と進んでいこう。それが私のかわいい子供、私の愛する母を本当に喜ばせる道ではないか！

このように決心すると、私の胸は膨らみ、翼の生えた鳥のようにふわふわと飛ぶようだった。

私はその日の昼間出発の準備を終えて、母に遊撃隊伍についていくことになったと話した。それまでまさか私が離れはしまいと思い、またそのように信じようと努めてきた母は、私のこの言葉を初めはそのまま信じようとはしなかった。大切に伸ばしてきた垂らし髪を切って母に記念に差し出しながら、

「オモニ、これを受け取ってください。そして勝利して再び会うその日まで、どうかお体を大切にしてください。」と言った時やっと私の決心を信じてくれた。そして母は涙を流しながら、

「子供は私が引き受けるよ。安心して行って立派に戦いなさい…」と言って声を詰まらせ、それ以上言葉を続けることができなかった。

私は子供の古いチマを記念に持っていくことにして荷の中に入れた。そして子供に綿入りの足袋を履かせ、日が暮れると私たちは遊撃隊員たちと後方の家族たちが互いに別れることになっている川辺に向かった。私の背中に負われた子供は時々寒くて目を覚ました。私はそのたびにもうちょっと行ったらおばあちゃんに負ぶさって行かなければいけない、泣いてはいけないと言い聞かせてやった。

実際〈討伐隊〉の奴等に発覚される心配があって、話も耳打ちでする状態だったので、幼い子の泣き声は禁物だった。うたた寝から覚めた子供は、私が言い聞かせるたびにすすり泣くのをぴたっと止めて静かにしていた。そして泣かないと返事までした。この言葉を聞く私

の心は痛んだ。
私たちは深い山林の中の雪道をかき分けながらおよそ三、四里も歩いてきた。私たちはそこで互いに別れるようになった。
私は子供を母に渡して背負わせてあげた。娘はその時目を覚ましたが、黙って祖母に負ぶさって頭を背中に埋めていた。
私は母にどうか気をつけていってくださいと言ってその前におじぎをした。そして私の子を最後にもう一度見つめた。その瞬間に、涙を流すまいと何度も心に決めていたのに、絶え間なく流れ出る涙を私は止めることができなかった。しかしこの涙は悲哀の涙ではない。希望と幸福を約束する熱い誓いの涙でなくてどうしようというように、私は母の胸に頭を埋めて泣き続けた。母は私の頭をなでてくれ、涙をふいてくれながら、「きっと生きてまた会おうね。その日だけを信じて力強く生きていくよ。」と言った。私たちは別れた。
雪に覆われた河の向こうに遠く消えるその黒く点々とした人々の後ろ姿を眺めながら私は心の中でこのように叫んだ。
「皆さん！　さようなら。良い日が必ず来ることを一時も忘れずに生きていってください。その日のために！　私たちの美しい未来のために、この身は歯を食いしばって闘い抜きます。敵を討ちます！」

★

トゥマン（豆満）江の氷塊をかき分けて（特選集18、第7巻第9話）

キム・ドンギュ

一九四三年の早春、キム・イルソン同志の命令を受けた我々偵察小組が咸鏡北道のラジン、ウンギなどに派遣されて偵察任務を遂行し、司令部に帰っていく時のことだった。

我々の一行はキム・ヒョクチョルトンムとオ・ガイトンム、そして私の全部で三名だった。

我々は日暮れごろにウンギの後ろの山の谷間を出発して目的地に向かった。

すでに何日も止まずに降り続いた雪は腰を埋めた。吹雪は前を見分けることができないくらい吹きまくり、寒さは骨の髄までしみこむようだった。

敵の厳しい警戒網を抜けて険しい山道を歩いてゆくので、いくらも進むことができずに我々の力は尽き始めた。

丈夫な人間でも耐え難いこの険しい路でオトンムは不意に関節炎にかかり、その苦労は並大抵ではなかった。

こうしてヒョクチョルトンムと私は腰まで埋めるまっさらな雪道をかきわけ、オトンムに

肩を貸しながら歩いていった。進むほど吹雪は勝気に振舞いながら猛々しくうなりをあげ、雪道はますます険悪になり、歩みはだんだん遅くなった。

しかし我々は一時も早く連絡場所まで行かなければならなかったので、互いに鼓舞し、助け合いながら引き続き前へ歩んでいった。約束した時間までに連絡場所に到着できなければ我々はトゥマン江を越えることができなかった。連絡場所には小舟が待機するようになっていたのである。

我々は一晩中吹雪と闘いながら歩みを促したが、夜が明けるまでにやっと半分を少し越えたに過ぎなかった。しかし連絡場所まではまだはるかに多くの距離が残っていた。

吹雪は夜が明けてさらに猛々しく吹き荒れた。

何日も何も口に入れることができずにこのように激しい吹雪と闘いながらまっさらな雪道をかき分けて険しい山を越えようとするのだから、その困難というのは到底想像を絶するものだった。足はだんだん鉄の塊のように硬くなり、のどからはぬかが燃えるような匂いが漂った。

しかし我々はへたりこまなかった。

我々三人は互いに肩を組み、腰を抱き合って、一身になって歩いた。

三人が力を合わせて一緒に歩くと、吹雪との闘いはより容易だったが、歩みは倍も遅かった。

約束した時間を考えると焦ること限りなかった。
このまま進んでいてはその時間のうちに到底目的地まで行き着けそうもなかった。
やむを得ず我々は相談し、私が先に連絡場所に行って連絡を取ることにした。
私は彼らがついてくる道をかき分けながら前を歩き、その後ろからヒョクチョルトンムがオトンムを助けてついてきた。
このようにして私は次の日の午後にやっと敵の国境警備哨所を抜けてかろうじて連絡場所に到着することができた。
ところがどうだろう！　すでに時は遅く、そこには誰もいなかった。
約束した時間内に必ずたどり着こうとある限りの力を尽くして急いで来たが、結局時遅く到着したのだと分かるや、私は力ががくっと抜けた。
私はいずれにせよ二人のトンムが来るのを待つよりほかになかった。ところがどうしたわけか彼らはなかなか現れなかった。
私はただならぬ思いが浮かんであたふたと彼らを探して、来た道を引き返した。しばらくしてやっと私はかすんだ吹雪の中を彼らが来るのを発見して歩みをせかせて彼らに向かって進んだ。
近づいてみると、二人のトンムは一、二歩歩いては倒れ、しばらく倒れていてから再びやっと体を起こしながら一寸一寸歩いてきていた。

オトンムはすでにほとんど意識を失っており、もうヒョクチョルトンムまでも自分の体さえ支えることが困難な状態だった。

二人のトンムは私を見るやたちまち雪の上に力なくばたっと倒れた。

私はすぐにオトンムを抱き起こした。彼の顔には血の気がなくなり、ただ唇の周りにやや赤い斑点が残っていた。

彼らは途中であまりにも空腹がひどく、我々を助けてくれた老人からもらったしょうゆを一飲みずつ飲んでは雪をつかんで食べたのだった。そうしてでも空腹を満たしながらやっとここまで来ることができた。

しかしもう一歩も歩むのは困難だった。私の状態も彼らとほとんど変わりがなかった。

みぞれは引き続き我々を埋めてしまうかのように全身に覆いかぶさってはすぐに凍りつき、我々はまるで氷でよろいを一丁作って着たようになり、はらわたには氷のかけらが詰まったようだった。

すると外側から内側まで凍ってゆき、体は文字通り氷の塊のようになって、その寒さは言いようのないほどだった。

そうかといってそのままではいられなかった。我々はどんなことがあってもトウマン江を越えなければならず、任務を完遂しなければならなかった。

我々の前には元気を回復することが急先務となった。そこで私とヒョクチョルトンムはオ

トンムを風をよけるところに隠して、食糧を探しに出かけた。
「オトンム！　食べるものを手に入れてくるからちょっとだけ待っていてくれ…」
我々は、話す力さえなくて目で答えるオトンムを楽に座らせてその場を発った。
しかし力の尽きた体で進むその道は並大抵の苦しさではなかった。我々は吹き荒れる吹雪にまかれて雪の上に倒れながら重い歩みを移した。
ところが、自分自身もひどく疲れた体だった上にオトンムを助けながら必死に歩いてきたヒョクチョルトンムまでとうとう途中で雪の上に倒れたまま再び起き上がることができなくなった。
私はヒョクチョルトンムをくぼんだところに連れて行って座らせた。
そして、その場から絶対に動かずに待っていてくれと再三頼んで、一人で向こう側にある部落に行った。
吠え立てる吹雪の音だけが高いばかりで、村はしんと静まり返って人の影一つ見当たらなかった。数軒の家を回ってみたが、みな同じだった。
この村の殺風景は私の胸を針で刺すようだった。扉が落ちて転がり、あちこちに家具が散らばっていた。日帝の奴らが侵略戦争のためにこの部落の住民たちを強制的に移住させたのが明らかだった。
この光景を見た私の胸はこみ上げる敵愾心で燃え上がった。そして、最後のあがきをする

日帝を必ず撃滅させようという固い決意をさらに胸に深く抱きながら私は歩みを移した。
私はある農家の廐の飼い葉桶に秣が残っているのを何気なく覗いてみた。秣にはうまそうな黄色い豆粒が混ざっていた。
「豆だ！　豆があるぞ！」
私は両手で豆粒の混ざった秣を一掴みつかんだ。
いくらにもならない豆粒ではあったが、この豆粒が我々三名の命を救ってくれるのだと思うと、私はそれが何にも引き換えることのできない貴重なものに思えた。
私は早く拾って持っていこうと思って腰をかがめた。瞬間気がぼおっとなって私は飼い葉桶の上に倒れてしまった。
どれほど時間が流れたのか…。
ひどい寒さを感じた私はびっくりして目を開けた。
あたりはすでにたそがれで薄暗くなっていた。
気を取り戻した瞬間、（トンムたちはどうなっただろうか？）という思いが私を捉えた。
私は体を起こそうとしたが、手足が木のように硬直して動かすことができなかった。大変な苦労をした末にやっと私は少しずつ体を動かすことができた。
散らばった秣から一握り残った豆粒を握った私はトンムたちのところに急いで戻った。
「ヒョクチョルトンム！　オトンム！…」

私はトンムたちの名を続けて呼びながらあたふたと歩いた。しかし力が尽きて体が動かなくなり、私の呼び声は口の外に出る前に再びのどの奥に引っ込んだ。

ヒョクチョルトンムはその場にいなかった。

私はその周辺の谷間と山をくまなく探し回ったが、依然として見当たらなかった。

不吉な予感が不意に浮かび胸が無性に締め付けられた。

（彼はオトンムのところに行ったのではないだろうか？…）私はこのような思いに一つの希望をかけて無我夢中でオトンムのいるところへ走った。

ヒョクチョルトンムはそこにもいなかった。私は目がすっかり暮れるころにやっと雪の中に埋まったオトンムを発見した。

急いで手で雪を掘り返してオトンムを抱き起こした瞬間私の胸はどきっとした。

彼の体は氷のようで、温かみはどこにも感じられなかった。

「オトンム！　オトンム！」

急いでゆすぶりながら呼んだが、彼は終始何も答えなかった。

「オ・ガイ！」

私はのどがむせんでそれ以上声を出せなかった。あまりにも悲惨なことで涙も出てこなかった。

雪の上には同志たちに与えようと持ってきた豆粒が散らばって、降り積もる雪にすでに半

分以上覆われていた。
それを見た瞬間積もっていた鬱憤がいっぺんにこみ上げてきて息が詰まった。そして同志たちに生じた不幸があたかも私の誤りから生じたかのように思え、胸が裂かれるように苦しかった。
「オ・ガイ！　もうちょっとだけ持ちこたえてくれたら…私が…私が遅かった…」
私はオトンムを抱きしめて身をもだえた。そして悲憤に震える胸を抱いてこの日の夜を眠らずに明かした。
次の日私は明け方早くから四半日の間ずっと雪の中をかき分けながら探し回ったが、とうとうヒョクチョルトンムの行方を探し出すことができなかった。ヒョクチョルトンムが雪に埋まって犠牲になったということを私は後になってやっと知った。
力が尽きて戻ってきた私は雪をかき集めてオトンムの死体を心を込めて埋めた。熱い涙が止めどもなく流れ落ちた。
あらゆる風霜と辛苦をなめながら十年を一日のごとくただ祖国の光復のその日のために、革命の勝利のために勇敢に闘ってきた戦友たちとこのように離別することになろうとは誰が知ったろうか！
考えれば考えるほど悲痛な思いをこらえがたかった。
しかしいつまでもその場に座していることはできなかった。私の前には彼らが残した革命

の任務が待っていた。
敵に対してこみ上げる敵愾心、同志たちを失った悲痛な気持ち、必ず任務を遂行しなければならないという重い責任感—これらの全てが私に勇気と新たな力を呼び起こしてくれた。
（そうだ！　悲しんでばかりいる時ではない。敵に百倍、千倍に復讐するために、彼らがあれほど願った自由で幸福な祖国を一日も早く取り戻すために、どんなことがあっても部隊に帰らなければならない！戦友たちが命と引き換えにした偵察資料を遅れることなく上部に報告しなければならない！　行こう、トゥマン江を越えよう！）
私はこみ上げる敵愾心で胸を燃やしながら、彼らがかなえられなかった革命の道、祖国光復の道を受け継いで、悲壮な決意を固め、トゥマン江のほとりへ歩いていった。
昼の三時ごろだった。
山野を覆いながら川の上を吹きまくる強い吹雪で、川の向こうはもちろん、近くにある日帝の奴らの哨所からも私を発見することは困難な状況だった。
凍りついた手足をさすっていざ水に入ろうとすると、同志たちに対する思いが不意に浮かんできて、なかなか足が進まなかった。
後ろを振り返り、目を瞑って同志たちともう一度永訣する私の目の前にはヒョクチョルトンムとオ・ガイトンムの姿が浮かんだ。そして彼らとともに過ごした数々のことが目の前をかすめていった。

回想すればするほど胸は痛み、敵に対する敵愾心と任務を遂行しなければならないという重い責任感がいっそう強く沸き上がった。

（…私は必ず任務を遂行しよう！　必ず日帝を掃蕩して同志たちの仇を討とう！…）

私は川の方へ向き直った。

早春で、川には大きな氷のかけらがぶつかっては壊れ、騒がしく音を立てながら流れ下っていた。泡を立てて互いに逆さに落ちながら流れ下る黒々とした川の水は見るからに恐ろしかった。

しかし私がいまさら何をためらおうか！

川の水が猛々しいとてそれがどれほど猛々しく、それが恐ろしいとてどれほど恐ろしいというのか！

私は、ただ祖国の幸福な前途のために自己の全てを捧げて闘った戦友たちの、鋼鉄よりも固く、火よりも熱いその精神を持ってためらいなく川に入った。

川の水は私を容赦なくあちこちに押し、倒した。しかし私は川の水に押されることも、氷のかけらが流れ下ってくることも考える暇もなく、かまわず前へ、さらに深い水の中へどぼんどぼんと入っていった。

私の体はいくらも進まずにかちんかちんになり、心臓はそのまま止まってしまいそうだった。

しかしもうどこへ退くこともできなかった。
私はなんとしてでも川を越えなければならないという一念で、ある限りの力を尽くして体を動かし始めた。歯を食いしばって前へ進んだ。
いくらか水の流れに流されていって一息ついては再び手足を動かして泳いだ。
このようにしてやっと川の真ん中ほどに来た時、もうそれ以上泳ぐ筋力がなかった。それに加えて手足は痙攣を起こし、舌までもつれた。
あっぷあっぷしていた私は渦巻く水の中にそのまま頭まで沈んでしまった。必死になって水の中からやっと浮かび出てもすぐまた沈んだ。最後には耳がぼおっとなり、何も見えなくなった。
まだ対岸まではるかに遠かった。再び水の中に沈んだ瞬間、私の頭の中にはヒョクチョルトンムとオ・ガイトンムの姿がはっきりと浮かんだ。そして、偵察資料を一時も早く上部に報告しなければならないという彼らの声が耳元で響くようだった。
私は心の中で叫んだ。
(生きなければならない！　偵察資料を持って必ず帰らなければならない！)
私は大変な苦労をした末に再び水の上に浮かび上がった。ちょうどその時私は流れてきた氷塊の一つをつかむことができた。
氷塊をつかんでしばらく流されていった私はありったけの力を尽くして別の氷塊に移った。

こんなことが数回反復された。
こうしているうちに凍った肉は刀のような氷塊の角で裂かれ、切られて、いつの間にか全身は血まみれになった。
しかし私はそんなことを省みる余裕がなかった。私の頭の中には（同志たちの意志を受け継いで必ず川を越えなければならない！　億千万べん死のうとも必ず同志たちの復讐を果たさなければならない。）というただこの一念だけだった。
押し寄せる氷塊をかき分けながら冷たい水の中でもがいていた私はとうとう川を越えてしまった。
川岸に上がった私は倒れたままびくともできなかった。私はしばらくしてからやっと頭を上げ、周辺を探った。
もしやトンムたちでも見えはしないかと思って見回してみたが、何の人の気配もなかった。
私は起き上がることができなかった。しかし一時も早く同志たちに会わなければならないという思いで、最後の力を振り絞って這い、転がりながら前へ進み始めた。
体を動かすたびに氷塊に裂かれた傷が固い地面に触れて耐えられないほどひりひりと痛んだ。声を挙げてみようとしても舌を動かすことができなかった。
しかし私は歯を食いしばって休むことなく這い、転がりながら続けて前を急いだ。
私が雪の上で一、二度転がってしばし頭を上げた時、私の目の前には何かがちらつくのが見

えた。瞬間思わず右手が腰に差した拳銃に触れていた。

しかし次の瞬間ぼんやりと見える映像の中から私は顔なじみのトンムの姿を発見した。

「ハン・チョンチュトンム！」

懐かしいトンムの名を呼んでは、私は急いで近寄ってきたハントンムに身をゆだねた。そして顔を彼の胸にうずめたまま気を失ってしまった。私は次の日の午後にやっとトンムたちが囲んで座った中で意識を回復した。

今でも私はその時のことを回想すると、どのように、どんな力で川を越えたのかよく分からない。

しかし一つだけは言うことができる。それは、キム・イルソン同志の領導の下に、祖国の光明の差す未来のために最後まで屈せずに闘った革命の戦友たちの不屈の闘争精神、彼らの崇高な意志を受け継いで最後まで任務を遂行し、同志たちの仇を討ち、必ず祖国を解放しようという固い決意—まさにこの革命的意志の力によって、私は猛々しく激浪を起こしながら流れるトゥマン江を越えることができたということである。

その後私は困難なことにぶち当たるたびに、常にトゥマン江で経験したあの時のことを考えながら、そこから新たな力と勇気を得て闘争し、解放後祖国の地を再び踏むことができた。★

カガヨンでの工作（全訳「敵を瓦解させて」、第3巻第21話）

キム・ドンギュ

一九三八年の初夏キム・イルソン同志から重要な政治工作の任務を受けた我が小組の一行は、チャンベク県八トグの入り口に落ち着いた。ここで私は再び単独任務を引き受けて、リムガン県カガヨン部落へ出発した。

私がそこに行って遂行しなければならない任務は非常に重要かつ緊迫した問題だった。

私はカガヨン部落に行って反日会を指導援助しながら、同時に彼らの協助の下に、武装隊伍に至急に要求される各種の物資と出版物を購入しなければならなかった。

この時期の状況でこのような任務を遂行するというのは非常に困難なことだった。

当時日帝は朝鮮人民革命軍に対して執拗な〈討伐攻勢〉を敢行する一方、〈集団部落〉制度を強化し、部落内の住民に対する取締りを今までになく厳しくした。カガヨンの実情だけを見ても、奴らはここに三十余名の偽満警察隊を常時駐屯させて警戒を強化する一方、走狗たちを潜入させて常に人民の動向を監視していた。

しかし私はこのような困難な状況であるほど、キム・イルソン同志が提示された統一戦線政策を忠実に執行することによって、全ての人民を日帝を打倒する道にいっそう力強く結集させることが私に与えられた任務であると考えて、工作地に歩みを急がせた。

密林の中を数日間歩いて私はカガヨン付近のウァン・ヨンヂャン山林部隊の密営に到着した。私は司令部を出発する時に、まずウァン・ヨンヂャンを通じてカガヨンの実情を了解してから工作に着手するようにという指示を受けていたのである。

彼に会って司令部の信任状を見せると、ウァン・ヨンヂャンは私の手を取って揺すりながら非常にうれしそうにした。すぐに昼食を用意させる、宿所を決めてやると、歓待を尽くしながら彼は私にカガヨンの状況を詳しく教えてくれた。私は司令部との連絡場所もここに定めることにした。

次の日の夕方私はカガヨン部落の反日会の会長シン・チュンサンさんを訪ねていった。その時は農事の真っ盛りの季節だったので、部落の農民たちは大概畑の端に農事小屋を建てて生活しており、彼らと連携を結ぶには非常に有利だった。私はウァン・ヨンヂャンから聞いていたので、シン・チュンサンさんの農事小屋をすぐに探し出した。

彼は三十前後のやせて敏捷そうに見える人だったが、一目でどことなく頼もしそうに見えた。私と向かい合って座ると彼は大変な喜びようで、キム・イルソン同志の安否と遊撃隊の新しい消息などを続けざまに聞いた。

彼を通じて、ここの反日会組織が比較的健全で、非常に広範に広がっているということを知ることができた。その日は今後反日会活動をいっそう強化する必要性だけを強調して、次の日の明け方ウァン・ヨンヂャン部隊の密営に帰ってきた。それは昼間農事小屋にいれば人の目に付くかも知れないからだった。

その日の夜再びシンさんの農事小屋を訪ねていき、反日会の核心たちと集まりを持ち、そこで遊撃隊を援助する問題と、今後進めるべき活動内容を討議した。

我々の活動は活気を帯びて展開された。警察隊と走狗の目を避けながら敵情通報や「東亜日報」、「朝鮮日報」、「日満報」その他小冊子などの出版物がチュンサンさんの農事小屋に入ってき始めた。

しかし我々の工作はいくらも経たずにカガヨンの走狗と警察の奴らのしゅん動によって大きな障害を受けるようになった。

(…やっと定着し始めた我々の組織が敵に発覚すれば、自分の引き受けた工作任務の遂行はおろか、革命に莫大な支障をきたすようになる。…)

このように考えるととても安心できなかった。その上まだ闘争に洗練されていない組織と会員たちの未熟な活動などを考慮するとなおさらだった。

私は数日の間考えた。広げられた活動を敵の監視が緩和するまで一時停止してしまうこともできないことだった。昂揚し始めた会員たちの気勢をいっそう培ってやる方向でこの難関

を突破しなければならなかった。そのためにはただ積極的な方法だけが要求された。

（どのようにしたらよいか？）

私は急に我々に常に強調されていたキム・イルソン同志の言葉が想起された。

…もしも活動の相手側に反日的な要素が多少でもありさえすれば、たとえその人間が敵の機関に服務している人間だとしても、我々は大胆にその人間を教育して我々の側に立たせなければならない。…

キム・イルソン同志のこの言葉はあたかも光明の光のように私の前途を照らしてくれた。私にはカガヨン警察署長を我々の側に引き入れるか、あるいは中立化させることはできないだろうか？　という大胆な考えが浮かんだ。もちろん初めは非常に漠然としていて自信も湧かなかった。しかしだんだんカガヨンの実情を了解するようになり、また警察署長の評判も聞くようになってからは、いつのまにか自信が湧き始めた。それは何よりも署長が日帝の奴らをそれほど快く思っていないという事実を知るようになったからだった。

問題は今署長に私がどのように接近するかということだった。私が直接警察署に彼を訪ねていくことはできなかった。

まず誰か署長と良く知り合っている人を通じて彼と接触する機会を持たなければならなかった。

私はシン・チュンサンさんと相談した。話の過程で、ここの署長がどんな人間かについて

はこの部落のウァンという人が非常によく知っているということを知った。彼の話によれば、ウァンという人は幼いころから孤児として育ち、四十になる今日まで一定の職業もなくあちこち流れ歩いた人で、数年前から付近の農事小屋に住みながら農事をしているということだった。そして彼は人なつこさがあり、心が広くてやさしく、顔は広いほうで、ここの警察署の署長とも比較的親しい間柄だと言った。

その日の夜私はシンさんの紹介でウァンという人に会った。まず私はウァンさんの心情から探ってみることにした。そこであれこれ話をするうちに話題を日帝軍警の奴らのことに向けると、彼はすぐに顔を赤らめながら、この部落にも時々奴らが襲ってきたりするが、奴らは百姓を犬や豚ほどにもみなさずにむやみに殴るし、さらには罪のない人に言いがかりをつけて殺すことまであると憤慨するのだった。

その後私は数日間付き合う間にまず彼と人間的に親しくなった。そして機会あるたびに彼の民族的意識を高めてやることに努めた。ウァンさんは昔の本を好んで読んだ。そこで私は彼に昔の本を読んでくれと頼んでは、その内容から封建統治の輩や外敵に反対する人民の闘争について話を展開し、その話の中で先祖の崇高な愛国心を我々は見習わなければならないと強調した。このようにおよそ一と月彼と付き合った。ついにウァンさんは私といっしょにやることならば何でもやろうと決心するようにまでなった。

私は彼にまずいくつかの大きくない任務を与えてみることにした。彼が任務を間違いなく

遂行するのを見て、私はある日彼と二人だけで会ってそっと、私が朝鮮人民革命軍の一人であるということと、キム・イルソン将軍の意を受けてここにやってきてその任務を遂行しているのだということを話した。そしてこの緊要な時に警察の厳しい警戒と取締りが厳しくなった関係で活動が困難になったという事情を説明しながら、何とかしてここの警察署長に引き合わせてくれたら彼を説得してみようという私の決意をそのまま話した。

彼は私の話を黙って聞きながら何か深刻に考えると、しばらく後にこのように言った。

「私も先生が普通の人間ではなくて何かをやっている人だとは思っていました。私もこのような機会に先生を助けることができたらどんなにいいでしょう。私もウェノム（日本人の卑称）をやっつけるために力の及ぶ限り闘ってみようと以前から決心していました。しかし今度のことだけは全く思いがけないことだし、その上非常に危険なことなので…とにかくちょっと考えてみましょう。」

私は彼が一定の決心を持つようになるまで待たなければならなかった。その間も反日会員たちを通じて活動が続けられはしたが、警察隊の奴らの監視と警戒のために、ことが思うように進まなかった。引き受けた任務のことを考えれば考えるほど、この一日一日がこの上なく無駄に目を費やすようでつらかった。

（今日もトンムたちはどこかで雨のように降り注ぐ敵弾をかいくぐりながら身を捧げて戦っているのではないか？　そして司令官同志はその合間にもまさにここの活動の成果を待ち焦

がれておられるのではないか？）

こう考える時私は限りなくやるせなかった。しかし私はこのつらい心情をさらにぐっと抑えて辛抱強く待たなければならなかった。

三日が過ぎた。ウァンさんはついに私にこのように言った。

「先生と警察署長を会わせるのは、私たちの友人としての義理でもあると同時に、我が国のためだということを私ははっきりと悟りました。」

私は彼の手を力いっぱい握った。

私は彼と方法を相談した。ウァンさんは署長と私が会うのには、民間で伝統的に受け継がれてきた互助組織に入るのが上策だと言った。

私もその組織については知っていたので、彼の提起にすぐに賛成した。その時初めてウァンさんは自分たちの秘密を教えてくれた。それによると、ウァンさんはすでにだいぶ前から署長と義兄弟を結んでいるということだった。だから今は私が自分たちの互助組織に入るように署長と相談することから始めなければならないという意見だった。

次の日ウァンさんは署長に会いに出かけることになった。私は署長に贈り物として阿片と少なからぬ金を用意した。

しかしいざ彼を送り出すようになった時、私は彼が署長にどんな方法で問題を提起するのかが心配になった。下手に話を持ち出して、苦労して立てた塔が一晩のうちに崩れてしまう

こともありえた。（彼が反日感情を持っているとはいっても、やはり日帝の傀儡である警察署長ではないか！……）という疑念も生じた。

ウァンさんはこのように言った。

「私は署長に単刀直入に切り出します。『朝鮮人民革命軍の高い幹部が我々と義兄弟を結ぼうと言っている』というのです。」

彼はそのような考えだった。どうせウァンさんは警察署長と義兄弟なのだから、私が別のことを言えといっても、本心を言ってしまうだろう。互助組織の規律における特徴の一つは、自分たちの間で隠し事があってはならないということだった。

とうとう署長のところへ出発したウァンさんは、夕方に帰ってきてこのように結果を伝えた。

署長はウァンさんの話を聞くや、飛び上がって、「そんな人間とは会う必要もない。」と強硬に反対したという。しかしウァンさんは署長が最初はそんな態度に出てくるだろうと予想していたので、しっかりと対策を立てて取りかかった。そして順々に話を進め、朝鮮人民革命軍というのは恐ろしい人間たちではなく、皆良い人たちであり、日帝に反対して戦う真の人民の軍隊だということ、そして特に今農事小屋に来ている朝鮮人民革命軍の幹部は、直接キム・イルソン将軍の意を受けて署長を訪ねてきたのだと伝えたという。

この話に署長はしばらく考えた末に、それなら会ってもよいが、絶対に警察署の外では会

うことはできないと答えたという。ウァンさんは執拗に、自分と一緒に会うのだから何で内外にこだわる必要があるかと署長をなだめてみたが、署長はウァンさんの話に耳を貸そうとせず、意見を異にしてこのように言ったという。

「どう考えても私が朝鮮人民革命軍の高い幹部に会う必要はなさそうだ。その人が要求するのは結局自分たちの活動に干渉するなということなのだから、私が干渉しなければよいではないか。私もウェノムを憎む人間だから、朝鮮人民革命軍の活動を妨げはしない。」

署長の態度は私に多くのことを考えさせた。彼が悪質な日帝の走狗ではないということはいっそうはっきりした。しかし日帝に対して反感を持ちながらも、やはりその〈威力〉に恐怖心を抱いており、一方朝鮮人民革命軍に対してはまだ認識が希薄であることは明らかだった。そのため彼は中間で動揺していた。

私は署長とさらに積極的に接触しなければならないし、そのためにはまず彼が我々を信じられるようにする問題が緊要だと考えた。そうして後彼の反日意識を高めてやれば、彼を我々の側に引き寄せることが十分できると私は確信した。

次の日再び署長のところにウァンさんを送った。

…我々は虚心に話そうというのであって、圧力を加えて誰かを困境に陥れるような小ざかしい策をめぐらそうというのでは決してない。あなたが今後我々の活動を保障してくれるというのはありがたいことだが、我々としても一度会って立場を明らかにしたいし、またそち

らの事情も知って互いに問題を円満に解決するほうがいっそう良いではないか…こんな内容の趣旨を持っていったウァンさんは、やがて戻ってきた。署長が会うことを約束したというのである。私は喜んだ。

我々は会う場所と時刻を決めたが、その時刻は次の日の夕方八時に農事小屋で会うことにしたというのである。

私は次の日一日中どのように過ごしたのか覚えていない。近づいてくる八時がうれしくもあり、胸が騒ぎもした。しばらくの間あれほど苦労をして精力を傾けてきたことが今日の夕方やっと実を結ぶのだと思うと、感慨無量だった。

ところが夕方頃にウァンさんは一人でそわそわと戻ってきた。

（思わぬ事故でも起きたのではないか？）と思うと、私は胸がどきっとした。

ウァンさんは困ったという表情で非常にためらいながら私にこのように言った。

「先生は本当に署長と会いますか？　それも別の人を交えずに一人でです。」

彼は言うなれば今度は義兄弟である署長の顔を立てて、彼の任を受けて私を探りに来たのだった。この瞬間に来てまで何かを心配する彼らに私の心の中を見せてやれないのが残念だった。

「私が一人で会うのでなければ、いったい誰と一緒に会うというのです？　いつかも伝えたように、私が署長を捕まえたらどうしようとか、彼が私を捕まえたらどうしようとかいうの

ですか。我々は皆自分の国のために手を取り合って敵日帝と闘おうというのではありませんか。ご苦労ですがもう一度行って伝えてください。我々朝鮮人民革命軍はうそをつくことを知らないと。」

「私も全くそのように思っていましたが、署長がどうもなかなか言うことを聞いてくれなくて…」と言って彼は困ったというように言葉尻を濁したまま再び出かけていった。

私は警戒心を高めなければならないと思った。今のような状況では署長が態度をどのように変えるか分からないからだった。私は拳銃を腰に忍ばせ、農事小屋を出て外壁にぴたっと身を寄せて、署長が現れる道を注視していた。緊張した時間が刻一刻と流れた。

約束した時間よりはるかに遅れてやっと暗がりの中に二つの影が現れた。その挙動から見て心配することはないと思った私は、すぐに農事小屋の中に入って沈着に彼らを迎えた。署長はまだ二十五歳ぐらいの背の高い青年だった。入ってくるや彼は私をちらっと横目で見ながら動静を探った。ウァンさんは彼に私を紹介した。私は彼に丁寧な態度で先に挨拶した。彼も続いて向かい合って私にお辞儀をした。互いに座って私はまず最初の挨拶を述べた。

「老兄が高い位置にありながら、この近辺の管轄下の百姓たちをみなよく治めて非常によく世話をされているという話は以前から聞いていました。キム・イルソン将軍もこの事実をよくご存知で非常に満足されています。私も実際にここに来てみて本当に老兄を尊敬せざるを得ません。」

署長はその時やっと少し安心したように微笑を浮かべながら、「あまりにも過大なお褒めをいただいてかえって恐縮です。」と言うのだった。そしてあなたたちこそ本当にご苦労様ですと言った。

挨拶を終えると私はキセルに阿片を詰めて火までつけて彼に勧めた。当時これはこの階層における一種の風習化された礼儀でもあったのを私は知っていたのである。彼はその場に横になって続けてニ服吸った。そして私にも横になるよう勧めながら一服つけてくれた。私はやむを得ず受け取って吸うふりをしながら見ると、彼はすでに酔ってゆらりゆらりとまどろんでいた。彼が覚めるのを待って私は話を交わし、義兄弟を結ぼうと提起すると、彼は快く承諾した。こうして我々は義兄弟を結んだ。年齢から見て私が兄だった。

夜が深まった。

このころになると署長も気持ちが完全にほぐれて、心の中にあることをさらさらと打ち明け始めた。

彼はカガヨンに時々検閲にやってくるウェノムの教導官の奴が一番死ぬほど見るのもいやだと不平をぶちまけた。日本の教導官はこのカガヨンに現れると決まって言いがかりをつけて、むやみに人を殴ったり蹴ったりし、鶏を出せ、豚を出せというのでたまらないということだった。

私が考えていた点もまさにここにあった。彼に私はよそでの偽満軍と日帝との間にある軋

轢について話してやりながら、彼の民族的自覚を培ってやった。そして我々朝鮮人民革命軍はどんな人であろうと抗日しようとする人ならばともに手を取り合って進むのだということを分かりやすく解説してやった。すると署長は私の手をぎゅっとつかんで、自分も今後積極的に我々を助けようと言った。そしてとぼけたように目をぱちっと瞬きして見せながら、「私は昨日すでに部下たちを集めて、今後カガヨンでは銃一発撃つのも私の承認と許可がなくてはならないと言い渡しました。心にとめておいてください。」と言った。

我々は声を立てて笑った。そして署長はキム司令が自分を賞賛してくれたという話を繰り返し聞いて非常に喜んだ。

カガヨンでの政治工作はいっそう活気を帯びるようになった。

走狗の奴らは目をとがらせて臭いをかぎ出そうと努め、時には警察署に密告もしたが、署長はこれらの全てを握りつぶして目をつぶってくれた。

こうして我々はカガヨン部落の反日大衆を広範に団結させることができたし、付近の木材所の労働者たちとも連携を結ぶようになった。我々は彼らを通じて当面の物品の購入を円満に遂行し、出版物を定期的に司令部に送ることができた。警察署長は自分が読む新聞までもウァンさんを通じて我々に送ってくれた。そして署長はどこで工作したのか、多量の火薬を用意して我々に渡してくれた。

そればかりでなく、彼は日帝の軍警が現れさえすれば我々に適時に連絡してくれたし、奴

らの力量と行動方向などを詳しく書いて送ってくれたりした。

このようなことは当時の朝鮮人民革命軍の活動に少なからぬ助けになった。

こうして抗日の旗の下に日帝に反対する人民の闘争は、この地方でも激しい炎のように燃え上がり、彼らの物心両面の援助によって、我々はシンデヂャ戦闘を始めとする多くの戦闘で勝利を収めることができた。

★